

Frontline

国境を超えて命と向き合う

[フロントライン]

Vol.11
March 16, 2014

Feature

[対談]

国境なき医師団はなぜ証言するのか

— 日本社会、メディアとの関係は

ゲスト

藤澤秀敏 (ジャーナリスト)

国境なき医師団日本

黒崎伸子 (会長)、館 俊平 (広報担当)

国 境なき医師団 (MSF) の「証言活動」とは何か? メディア報道における人道的危機の取り上げられ方は、日本と海外で異なるのか? 私たち日本人が、海外で失われていく命に目を向ける意味とは?

「証言活動」をめぐるこれらのテーマについて、ジャーナリストの藤澤秀敏さんをゲストにお招きし、MSF日本の会長・黒崎伸子および広報担当・館俊平と対談していただきました。

国境なき医師団にしか証言できないことがある

館 MSFは、紛争や災害、貧困によって医療が欠如している場所へ赴き、無償で命を救う医療を提供しています。この面については、多くの皆様にご理解をいただいているのですが、もう一つの重要な使命である証言活動についてはあまり知られていません。証言活動とは、MSFが援助活動の現場で、人権侵害

や暴力行為などを目撃した場合、あるいは、援助活動自体が政治の道具に悪用された場合などに、それらを国際社会に向けて証言し、解決を訴えていく活動を指します。私たちは、これを医療活動と同様に重要な活動だと考えています。そしてその源泉は、MSFの設立経緯 [コラム①] までさかのぼります。

藤澤 確かに、日本におけるMSFの証言活動に対する認識は低いといわざるをえません。しかし、世界には、誰か

が証言しなければ、世の中に知られないままになってしまう不条理が存在していますから、証言活動は大変重要なことだと思います。

黒崎 私たちは、実際に現地へ足を運び、メディアでさえも取材しきれない状況を知りえますから、その情報を日本のメディアの皆様にももっとご活用いただけると嬉しいですね。

MSFは1999年にノーベル平和賞をいただいたのですが、受賞理由の公

知られざる事実を伝える

「証言活動」



南スーダンの難民キャンプで、スーダンで激化する戦闘を逃れてきた難民の証言を記録するMSFのスタッフ。

式発表においても、「証言活動が世論の形成に役立ったため」という記述があります。そして、その受賞スピーチの場でも、当時、無差別爆撃を受けていたチェチェンで目撃したことを証言しました。なおかつ、いただいた賞金をもとに、証言活動を伴った「必須医薬品キャンペーン」^[注1]を開始し、大きな成果をあげています。

証言するか？ 現地に残るか？ 究極の選択

黒崎 政治からの中立を原則としながらも、たとえば、現地の支配者や政府が援助を悪用している場合には、私たちは、それを証言しなくてはなりません。しかし、その証言のために、その国から退去を命じられてしまうことがあります。それでは活動ができなくなりますから、大きなジレンマです。そんなとき、私たちは「本当に苦勞をしている人たちと同じレベルで考え、行動をする」という原点に立ち返ります。その結果、たとえば私も参加したスリランカ内戦下^[注2]で

の活動のように、証言をせずに現地で活動をする選択をすることもあります。それでも、患者さんたちの状況を聞き取り、どういった状況で負傷したのかなど、後々に証言できる可能性に備え、細かく記録しました。

逆に、やむを得ず退去する場合は、その理由を、国際社会に向けてアピールします。たとえば、MSFは昨年、22年間にわたりソマリア全土で展開していたすべての活動を引き揚げました。MSFの活動に合意しているはずの地元の勢力にすら、援助従事者に対する暴力を支持・容認する姿勢があったためです。22年の間に、計16人のMSFスタッフが殺害され、スタッフや医療施設を受けた攻撃は数十回に上りました。もちろん、援助ニーズは極めて高いままですが、スタッフが背負うリスクを考えると撤退せざるをえませんでした。私たちは、こうした事実を、証言活動という形で、国際社会に向けて発信しています。

藤澤 MSFの証言活動によって国際社会が動かされてきた例もありますよね。

たとえば1994年のルワンダ大虐殺^[コラム①]では、国連部隊の数が少なく、虐殺を止められなかったということで、国連の平和維持機能の失敗例とされています。現地にはMSFは国連の撤退に抗議し、最終的には国際社会に武力介入を求めました。人の命を救うために、人の命を奪うかもしれない武力行使を呼びかけるという、かなり難しい決断をされたのだと思います。

館 武力介入が正当化されるか否か、MSFの歴史においてもルワンダは例外的で、内部でも議論が分かれました。**黒崎** 「人道的介入」や「人道援助」が、武力介入を正当化する便利な言葉になってしまうのは非常に危険です。アフガニスタンにおける多国籍軍の戦略がその例で、MSFはこうした動きを非難する証言活動も行っています。

藤澤 実際に武力介入をするかどうかは、国際社会が決めることです。MSFの証言活動の役割としては、放置しておけない状況を国際社会に訴え、国際社会に適切な対応を促すことだと

いえそうですね。

関心度の低さが ニュースにならない命を生む

館 MSFの証言活動は資金面でも特徴的です。まず、収入において公的資金の割合を抑えることで、活動や決断の自由、証言の自由を確保しています。また、支出の8割を援助活動に直接使う「ソーシャル・ミッション費」にあてることを自らに課していますが、この「ソーシャル・ミッション」とは「社会的使命」を意味する言葉で、MSFは医療活動だけでなく、証言活動に使う広報予算も募金活動費とは分けて考え、この中に含めています。

藤澤 つまり、社会的使命である医療・人道援助の中で、証言活動も重要であるということですね。

館 MSF日本では、私たち広報部が自他の媒体を通じて情報を発信し、証言活動をしています。日本ではなかなかメディアに取り上げていただけません。欧米では、MSFを含め民間の

NGOによる証言がメディアの情報源になることが多々あるのですが、

藤澤 その背景には、日本全体が国際的な出来事に対して関心が薄いということがあると思います。放送局や新聞社が、ニュースにするか否かを判断する基準は主に二つです。一つは、その情報を受け取る視聴者や読者の関心度。もう一つは、その情報自体の重要性。関心度も高く、重要性も高いとなれば、確実にニュースになります。関心度は低い重要性が高いという場合や、その逆の場合には、ニュースにするかどうかを判断しなくてはなりません。

たとえば今、中央アフリカ共和国では複数の民族対立が絡みあい、非常に深刻な紛争状態になっています。しかし、日本のメディアは、これをあまり取り上げません。一方で、中央アフリカの隣国である南スーダンでの指導者や民族間の対立はニュースにする。この差は、視聴者・読者の関心度における違いによるものだと思います。南スーダンには、日本が自衛隊の施設部隊を送っ

ていますし、石油産出国でもありますから、ニュースにする背景には日本との関係という戦略的な意味もあるでしょう。

他国の人道的危機に あなたは関心を持っていますか？

藤澤 日本の国際問題に対する関心の低さは、国際比較の調査^[コラム②]でも明らかになっています。もちろん国の地理的な状況や、他国との経済関係の在り方など、多くの要素が複雑に影響していることは事実です。しかし、日本としては、この結果は誇れるものではありません。そこで、メディアに求められることは、国際ニュースを扱う際に、視聴者・読者に関心を持ってもらえるような工夫をすることだと考えます。

私自身、前の職場であるNHKでキャスターをしていたときには、「複雑な国際紛争をどう伝えればわかりやすいか」、「日本人に馴染みの薄い国のニュースにどうしたら関心を持ってもらえるか」など、常に考えていました。

その結果、たどりついた答えは、その

ニュースが日本や日本人にどう影響するのかということ併せて説明するというものでした。たとえば、石油の高騰を伝える際、単に「1バレル100ドルになりました」と伝えるのではなく、それが「国内の産業にどう影響するのか」、さらに掘り下げて、「地場産業にはどう影響するのか」、「石油の高騰に対応して各企業はどのような対応策をとっているのか」といった具合です。

これからの時代は、自国のことだけを考えているのは、グローバル化した社会を生きていけないし、国際社会における役割を果たしていくこともできません。国際化をさらに進めないと、結果的に、日本にとって大きなハンディキャップになると思います。**黒崎** 視聴者・読者の側も視点を変えてみるというのかもしれない。私は、海外の現場に行き、子どもたちが裸足で外を歩きまわり、食べ物に飢えている様子を見ると、戦前の日本もこんな景色だったんだろうと思うんです。時を経て、同じことが他の国で起きていると捉える。実際に、今の日本があるのには、もちろん国や国民の努力もありますが、国際的な支援もありましたよね。そんなふうな、発信されるニュースを自

分側に寄せて捉えられると、遠く離れた国のことでも、少しは身近に感じられるのではないのでしょうか。

国を超えた助け合いを 実感した東日本大震災

館 黒崎さんは、どのような理由から、遠い国で起こっている出来事を、自分の関心事としてとらえ、MSFに関わるようになったのですか。**黒崎** 「あなたを待っている人がいます」というMSFの募集ポスターで私の人生が変わりました（笑）。日本の医療従事者が、医療が足りない海外で働くことも、大切な役割の一つ、選択肢の一つです。さらにこのことを後輩たちにも示せたらと思っています。

また、疾病や医療においても、グローバル化の波は押し寄せてきています。海外への行き来が増えた結果、日本ではまずからず病気になる人が増え、ウイルスが海外から運ばれてくる可能性も高まっています。実際、この20年くらいで病気の質や感染力が変化しています。医学的な側面から見ても、自国のことだけ考えていると自分を守れない時代に来たといえます。**藤澤** 「他国のことまで考える」という

^[注1] **必須医薬品キャンペーン**
医薬品が高価すぎる、途上国の環境で使えないなど「医療を受ける機会」の問題と、緊急性の高い新薬やワクチンなどの開発を促す「医療革新」をテーマに現場から証言するMSFのキャンペーン活動。

“結核マニフェスト”キャンペーン
3月24日、日本版開始！
www.msfaccess.org/TBmanifesto/

^[注2] **スリランカ内戦(1983～2009年)**
スリランカ政府とタミル人独立派との内戦。多くの市民が巻き添えになったが、政府は国際援助の介入や情報発信を制限し、MSFは現地に残留するため証言を控えることを選択した。

^[注3] **ダボス会議**
世界経済フォーラム(WEF)が毎年1月にスイスのダボスで開く年次総会。世界各国から政財界のリーダーや学者、宗教家、国際NGO関係者などが一齊に介し、さまざまなテーマに対して意見を交わす。

なぜ日本では世界の危機が取り上げられないのか



黒崎伸子

国境なき医師団(MSF)日本会長・外科医

長崎県出身。長崎大学医学部卒。国立長崎医療センター小児外科医長・外科医長を経て、2001年からMSFに参加し、ソマリア、シリアなど計11回派遣。長崎県の黒崎病院、市立大村市民病院で地域医療にも携わる。

藤澤秀敏

ジャーナリスト

徳島県出身。早稲田大学卒業後、NHK入局。香港や北米の特派員を経て、「ニュース9」等キャスター、アメリカ総局長、解説委員長を務めた後、2013年8月からフリーに。開発途上国の放送局支援にも携わる。

館 俊平(聞き手)

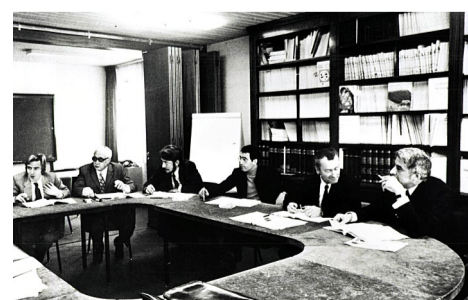
国境なき医師団(MSF)日本広報担当

大阪府出身。青山学院大卒。広報コンサルティング会社を経て、外資系IT企業やメディア企業の広報担当として、メディア対応や危機管理広報に従事。現職では、MSFの活動地からの情報発信も担当する。

[コラム①] 国境なき医師団の設立経緯

1967年、ナイジェリアのビアフラで内戦が勃発。食糧補給路が断たれて多数の市民が餓死する事態になった。国際赤十字(ICRC)の援助活動で現地に入ったフランス人医師たちが、ICRCの「沈黙の原則」を破り、政府軍によるビアフラ市民に対

する暴力への抗議を世界に向けて発信したことから国際社会が注目。1971年、そのフランス人医師たちと他の医師グループおよびジャーナリストたちによって、国境なき医師団(MSF)が設立された。



1971年12月20日パリにて、MSFの憲章に調印する創設メンバー。

[コラム②] ルワンダの悲劇

1994年、航空機が撃墜されフツ族の大統領が死亡したことを機に、フツ族過激派が虐殺を開始。わずか100日ほどの間に、ツツ族の市民とフツ族穏健派が殺りくされ、死者の数は50万人～100万人に上ったといわれる。その惨劇のさなか、国連

平和維持軍はルワンダを撤退。現地に残って活動を続けたMSFは、その撤退を非難し、各国政府にも援助を求める働きかけを行った。しかしながら、その後も事態が改善されないため、国際社会に武力介入を呼びかけることを決断した。



1994年7月、虐殺を逃れて避難するルワンダの市民。

[コラム③] 国際ニュースに関する調査結果

2010年に、世界11ヵ国の国民を対象に「国際ニュースに関心がありますか」と聞いた結果、関心の度合いが高かったトップ3はギリシャ(59%)、アメリカ(52%)、オーストラリア(49%)だった。日本は下から数えて2番目で28%。また、「テレビの

ニュース全体において、国際ニュースが占める割合」を調べた結果では、カナダ(36%)、ノルウェー(33%)、イギリス(26%)と続き、日本は19%にとどまった。

出典：国際ニュースに関する調査(林希里東京大学大学院情報学環教授ら11ヵ国11人の大学教授の共同研究、2010年)



「独立・中立・公平。MSFとメディアには相通じるものがある」

— 藤澤秀敏

傾向は、世界レベルでは当たり前になっています。私は、ダボス会議 [注3] を約10年、毎年取材してきました。かつては、自らの企業経営や自国の経済に直接的に影響のある、経済状況や金融状況などに関心が集まっていたが、最近では地球環境や資源の問題、あるいは災害の問題など、他国のことも含めたうえでの議論がなされています。実際に、2011年のタイの洪水では、自動車や電子部品のサプライチェーンが途絶えたことで、世界中で大混乱が起きましたよね。このように、他国での出来事が連鎖反応を起こし、自分たちに影響するということが、世界中で意識として高まっているといえます。

館 東日本大震災では、非常に多くの

国々から支援が寄せられました。黒崎さんは第一陣での現地入りでしたね。

黒崎 「MSFは海外で活動する団体でしょう？」とも聞かれましたが、「人道的危機があれば私たちはどこでも行きます」とお答えしたところ、なるほどと言っていました。あの震災は、日本人が「同じ地球上で起きる人道的危機に対する援助活動」というものを理解するきっかけになったと思います。

藤澤 人の結びつきが深まると、互いに関心も生まれ、理解も深まりますよね。その規模が広がった形が、本当のグローバル化といえるのかもしれないね。

黒崎 そうですね。私は日本でも診療をしています。患者さんに「海外で大地震がありましたよね。先生は行かれるんですか」と聞かれることがあるんです。日本人の私がMSFの一員として活動することが地道な証言活動になり、周りの患者さんの関心が高まると、小さな影響力かもしれませんが、とても



嬉しいですね。

メディアが、視聴者・読者が「今」できることは？

館 今回の話を通じて、MSF日本も受け手側に関心を持ってもらえるよう、工夫をしていく必要があると思いました。

藤澤 MSFは医療NGOとしては、パイオニア的な存在ですよ。あとに生まれた多様な団体と、それぞれの方針に基づき、多様な方法で、一つの目的、つまりは医療を得られない状況を解消していくことは、じつに素晴らしいことだと思います。

また、MSFの証言活動は、独立・中立・公平の原則に則っているわけですから、それはまさにメディアに求められる姿勢と同じです。しかし、メディアがすべての現場に行き、取材することは不可能です。そうなったときに、現場の声を伝えてくれるのは、MSFのように最前線で日常的に活動する人たちになります。

「私の活動を通じて日本の患者さんが関心をもつ。それが嬉しい」

— 黒崎伸子

「国際NGOとして現場の声を届けるためにさらに工夫していきたい」

— 館 俊平



したがって、私たちメディア側の人間には、現場の声をしっかりと吸い上げ、それを報道に生かし、より多くの人たちに伝える努力が求められていると思います。

黒崎 私は講演会などでいつも、自分が活動地で助けた患者、自分の胸に抱えた子どもが、もしかしら今は生きていないかもしれないという気持ちでお話しています。それが伝わると、多くの方が、日本に生まれてきたこと自体がどれだけ幸せかに気づき直して下さる。それはとても嬉しいことです。そのうえで、日本に内戦や紛争はなくても、災害や別の原因で命の危機は起こりうることに気づき、国内外を問わず日本人がなすべきことは何かを考えてくださるとなお嬉しいですね。

MSFとつながる

伝える facebookでは、こんな交流も

毎月2,500人以上の赤ちゃんが産まれますが、1,500g以下の子どもも多く、難しいことも多いです。でも、日本でもどこでも同じで、子どもから力をもらっています！

facebookに寄せられた応援メッセージにイラクで活動する内科医が返信

SNSでシェア!

Facebook Twitter YouTube

支援する いろいろな世代の方に支えられています

私は80歳ですが、若い人たちが大好き。たくさんの人びとを救う国境なき医師団に心から感謝！最高の生き方、なかなかできないことです。

寄付のお申し込み・資料請求は

【お電話で】
0120-999-199
通話料無料 (9:00~19:00/無休)

【ウェブサイトで】
国境なき医師団

● 支援者様から届いたお葉書

参加する ウェブサイトでは、「派遣スタッフの声」を好評連載中

MSFでは一般外科医もすべての外科処置に対応します。今回は腹部・頭部・顔面外傷、心血管外科など骨以外ほぼ全分野を担当。初めての症例や手術手技を1人で担当し、非常に難しいけれど、やりがいがありました。

● アフガニスタンでの活動を終えて帰国した外科医のレポート

MSF

『妹は3歳、村にお医者さんがいてくれたなら。』読書エッセイ・コンクールにご応募ください！

より多くの人に知ってもらえることが、状況を変える力になる——そんな思いを込めて、世界の現場で活躍してきたスタッフが執筆、刊行した『妹は3歳、村にお医者さんがいてくれたなら。～わたしたちが900万人の人びとに医療を届けるわけ』（国境なき医師団日本編著／合同出版）。

いま世界で何が起きているのか、人道援助によって何ができるのか知りたい方、また、子どもたちと一緒に考えてみたいという方、この本を読んで、新しく発見したこと、「命」や「医療」、「人道援助」について感じたことなど……皆さんの思いを自由に綴った作品をお送りください。

妹は3歳、村にお医者さんがいてくれたなら。

＊本を読んだ方なら誰でも応募可能。文字数は400～800字、締め切りは4月末日です。

＊入賞者には賞状と記念品を贈呈。

＊受賞者の作品は全文または一部をMSFのウェブサイト、および本誌『Frontline』に掲載。

＊ゲスト審査員にサヘル・ローズさん(女優・タレント)を迎えます。

詳細はウェブサイト(www.msf.or.jp/book2014)でご覧いただくか、下段の宛先にハガキか、お電話で応募要項をお申し込みください。

PRESENT

アフガニスタンでのMSFを描くフレンチ・コミック『フォトグラフ』を抽選で1名様に

下段の宛先にeメールかハガキで、「フォトグラフ希望」と明記の上、お名前とご住所、Frontline今号の感想を書いてお送りください。(2014年4月末日締め切り)

エマニュエル・ギベール著 / 小学館集英社プロダクション

バックナンバーはすべてウェブサイトでご覧いただけます。

トップページ下段から「MSF図書館」へ

【近刊のテーマ】

Vol.8 日常を追われた難民・国内避難民への医療

Vol.9 市民からの寄付が実現する医療活動

Vol.10 医療がない場所へ赴くことへの挑戦

Vol.11 国境なき医師団の証言活動 (New!)

Vol.12 命をつなぐ医薬品 (次号・6月発行予定)

国境なき医師団とは

国境なき医師団 / Médecins Sans Frontières (略称MSF)は、1971年にフランスで設立された非営利で国際的な民間の医療・人道援助団体。医師、看護師などの医療従事者とアドミニストレーターなどの非医療従事者、のべ6000人の派遣スタッフが、約3万人の現地スタッフとともに、約70の国と地域で活動を行う(2012年実績)。「独立・中立・公平」を原則とし、人種や政治、宗教にかかわらず無償で医療を提供する。また、援助活動の現場で虐殺や強制移住などの著しい人権侵害や圧倒的な医療の不足を目の当たりにしたとき、医療だけでは人びとの命を救うことができない現状を国際社会に証言している。1999年、ノーベル平和賞受賞。

MSF日本は1992年に設立され、2013年までに293人のスタッフを、のべ874回、活動地に派遣。MSF日本の活動資金はすべて、個人を中心とする民間からの寄付金でまかなわれている。

Frontline [フロントライン]
2014年3月16日発行 第11号

国境を超えて命と向き合う

特定非営利活動法人 国境なき医師団日本

Frontlineのご感想をお寄せください。

〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1 早稲田SIAビル3階
国境なき医師団日本「Frontline編集部」
frontline@tokyo.msf.org

TEL 0120-999-199
通話料無料(9:00~19:00/無休)

WEB www.msf.or.jp